

課題名 : 岩手県立図書館震災関連資料デジタルアーカイブズの利活用のあり方に関する研究  
 研究代表者 : ソフトウェア情報学部 講師 富澤浩樹  
 課題提案者 : 岩手県立図書館  
 研究メンバー : 伊東清勝(岩手県立図書館)、安保和徳(岩手県立図書館)、阿部昭博(ソフトウェア情報学部)  
 キーワード : 震災復興、震災関連資料、デジタルアーカイブズ、情報システム

### ▼研究の概要(背景・目標)

岩手県立図書館「震災関連資料コーナー」の利用活性のために試作した震災関連資料デジタルアーカイブシステム(以下、試作システム)について、その利活用場面に着目した研究を実施した(図1)。試作システムを通して、震災関連資料を支援するシステムのあり方について検討することが目的である。具体的な目標は以下の通り。

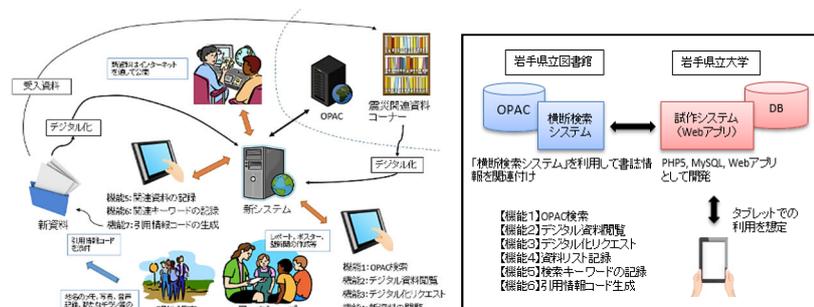


図1 基本コンセプトと試作システムの構成[1]

- 【目標Ⅰ】 試験的運用(ワークショップ、現地取材)に基づいた試作システムの改善、
- 【目標Ⅱ】 震災関連資料を用いた運用プログラムの計画・実施、
- 【目標Ⅲ】 試作システムを用いた資料の利活用のあり方に関する検討、

### ▼研究の内容(方法・経過)

【岩手県立図書館】は、業務知識の提供、知り得た関連情報の提供、試作システムの評価等に協力する。  
 【岩手県立大学】は、資料の利活用場面を想定したワークショップや現地取材を試験的に実施し、ICT環境の評価及び改善を行う。

### ▼研究の成果(結論・考察)

#### 1. 新聞見出し情報に基づく検索想起支援機能の研究開発(図2)

評価では利便性に関する課題が指摘された一方で、「図書館では用意できないキーワードが含まれている」「キーワードから当時を思い出せる」といった肯定的意見が多く聴かれ、著者らの観察でもキーワードに悩む様子なく検索する参加者の様子がうかがえており、本検索支援の有用性が確認された。

#### 2. 現地取材を伴う運用プログラムの開発と試行(図3)

昨年度要望が多かった現地取材(被災施設の見学(広域総合交流促進施設「シートピアなあと」「浄土ヶ浜レストハウス」)、住民へのインタビュー(宮古市藤原地区)、震災ガイド「学ぶ防災」への参加)を加えた運用プログラムを開発、試行した。アンケートより、各回の満足度は極めて高かった。また、複数日に及ぶ運用プログラムが実施可能であることも示された。

#### 3. 試作システムを用いた資料の利活用の在り方に関する検討

試行した運用プログラムは、多様な参加者の興味・関心を引き出すことができた。現場と資料を関連させた運用プログラムは、資料の利活用活性に有用であることが示唆されており、一定の方向性を導き出すことができた。と考える。

#### 結果1: 新聞見出しに基づく検索キーワード想起機能

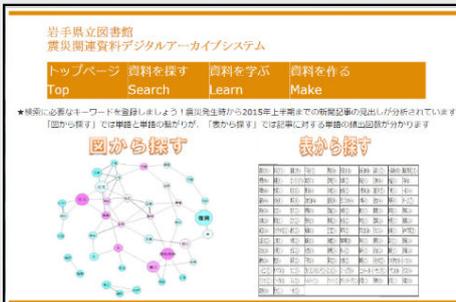


図2 試作システムの画面例

利用者の興味・関心からキーワードを想起させるための検索支援機能を研究開発した。情報源は利用者が目にする機会が多いと考えられる新聞メディアを対象とした(岩手日報「特集3. 11東日本震災一立ち上がり岩手」の3537件分の見出し情報(2011.3～2015.6掲載分)が中心)。これらをテキストマイニングした結果を図表にして用いた。

#### 結果2: 現地取材を伴う運用プログラムの開発と試行



図3 岩手県宮古市での現地取材(左)と最終発表会(右)の様子

各回3時間(現地取材は1日)、全4回のワークショップ(11/25(趣旨説明と試作システムの試用)、12/12(宮古市現地取材)、1/16(振り返り、新資料の作成)、2/7(発表))には、公募に応じた市民と震災学習に関心のある学生の述べ14名が参加した。

### ▼おわりに(まとめ・今後の展開)

【研究の成果】より、上記の【目標Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ】は達成されたといえる。今後の課題は、運用プログラムのバリエーションの検討・開発・充実とそれに伴う試作システムの改善である。本研究は「復興局主導で構築されるアーカイブと別観点からの取り組みであり、将来的に連携可能性がある」との評価を受けており、関連アーカイブとの連携可能性についても検討していく。